

第2章 遺構概説

藤原京は日本で初めて造営された中国式の都城で、条坊道路によって整然と区画された京域をもつ。藤原宮はこの中心に位置し、大和三山に囲まれた1km四方の範囲である。以下、藤原宮、藤原京の順に墨書き器を出土した主な遺構について記述する。記載した調査次数は、特記したもの以外は墨書き器を出土した調査に限っている。

1 藤原宮

SD105 (Fig. 4) 内裏の東を限る堀SA865の東側約5mにあり、内裏東官衙地区を南から北へ流れる素掘溝。藤原宮東半部の基幹排水路で、幅約5m、深さ0.7mの規模である。第4次調査で約20m、第55次調査で約40m、第58次調査で約45m、第61次調査で約25mを検出した。埋土は3層に大別でき、上

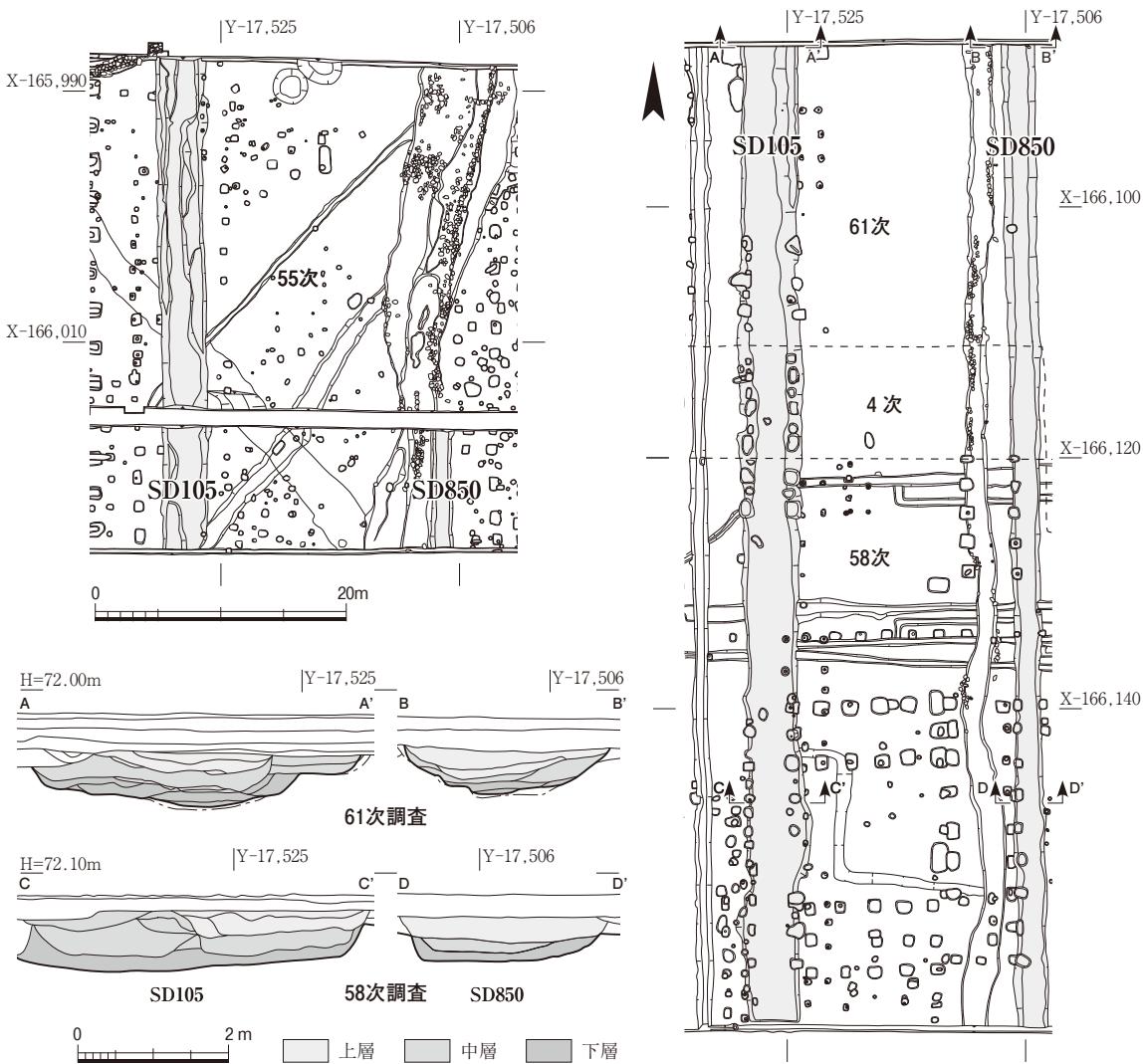


Fig.4 SD105・850遺構図 1:600・断面図 1:100

層は平安時代の遺物を含むが、出土土器は基本的に飛鳥Vとしてよい。墨書土器は第4次調査で1点、第55次調査で1点、第58次調査で1点、第61次調査で2点出土した。

SD145 (Fig. 5) 藤原宮の四至確認のために、宮西北隅で実施した第36次調査北区で約16mにわたり検出した東西溝。北面大垣SA140の北約24mの位置を西流し、宮の北面外濠にあたる。溝の規模は、幅約7.5m、深さ1.7mを測る。北面中門SB1900での第18次調査（墨書土器は出土していない。）で検出したSD145より溝幅がかなり広くなり、宮西面外濠SD260との合流点付近では、北へ大きく弯曲する。藤原宮廃絶以後も宮西北部での基幹排水路として機能していた。埋土は大きく3層に分かれ、上層は最終的な埋立土である。下層・中層の出土土器は飛鳥Vから13世紀代のものまでみられるが、大半は奈良時代前半の平城宮土器II・IIIに属する。墨書土器は16点出土した。

SD170 (Fig. 8・9) 東面大垣SA175の東約20mを北流する南北溝で、宮東面外濠にあたる。東面北門の位置及び規模と、三条大路計画線の確定を目的として行った第27次調査で約50mを検出した。溝の規模は幅5.5～6.0mで、深さは約1.2m。埋土は4層に大別される。東面北門周辺での一連の調査では、SD170・2300、SK2801などから大量の木簡が出土しており、周辺に宮内省被管官司の存在も指摘されている。墨書土器は飛鳥Vのものが2点出土し、記載内容は「麦」、「水」である。

SD260 (Fig. 5) 西面大垣SA258の西約21mを北流する南北溝で、宮西面外濠にあたる。検出した南端から北端までは939mにおよぶ。宮西外周帶での第23-5次調査では約1.5m分を確認し、当初は幅10m、深さ1.9mであるが、最終的に幅8.8m、深さ0.8mになるとされた。

宮西南隅で四至確認のため実施した第34次調査では、27m分を検出した。規模は幅約10m、下底幅5m程度、深さは北端で1.6m、南端で1.3mを測る。後世の氾濫と浸食によって著しく拡大、変形している。埋土は4層に分けられ、出土土器は最下層が飛鳥Vから平安時代初期までで、奈良時代後半のものを一定量含む。上層では10世紀の土器が出土しており、宮廃絶後もこの溝がこの地域の基幹排水路として長らく存続していたことを示している。

宮西北隅での第36次調査北区では、21m分を検出した。溝の規模は幅17m以上、深さ1.5mを測る。宮北面外濠SD145と同様、西南隅の第34次調査で検出した上流部の溝より幅がかなり広くなる。埋土は3層に大別される。下層は飛鳥Vから11世紀代までの土器、中層は12世紀代、上層は13世紀代までの遺物を含む。墨書土器は主に下層の堆積土から出土した。

藤原宮西面中門地区で実施した第37次調査では、22m分を検出した。溝は浸食が著しいが、深さ約2.1mで、本来の幅は6m程と考えられている。藤原宮期の遺物は少なく、出土土器の多くは奈良時代前半のもので、平安時代のものも含む。

墨書土器は23-5次調査で2点、34次調査で13点、36次調査で6点出土している。第37次調査では36点出土し、「宮」と記した墨書土器が6点あることが注意されている。

SD501 (Fig. 5) 南面大垣SA2900の南約24mを西流する東西溝で、宮南面外濠にあたる。第34次調査では約10m分を検出した。宮西南隅において宮西面外濠SD260と接続するとみられる。溝幅は東端付近では約6.2mあるが、氾濫によって広がったもので、北岸は北西方向に斜行してSD260東岸へ向かう。溝下底には幅約3mの本来の流路痕跡を残している。溝の埋土は4層に分かれ、SD260と同様の状況を示す。墨書土器は3点出土した。

SD850 (Fig. 4) 内裏の東を限る溝SD105の東約20mの位置を南から北へ流れる溝で、内裏東官衙の西限の塀SA6051・6630・6635の西約4mの位置にある。第58次調査で45mにわたって検出した。幅2.4

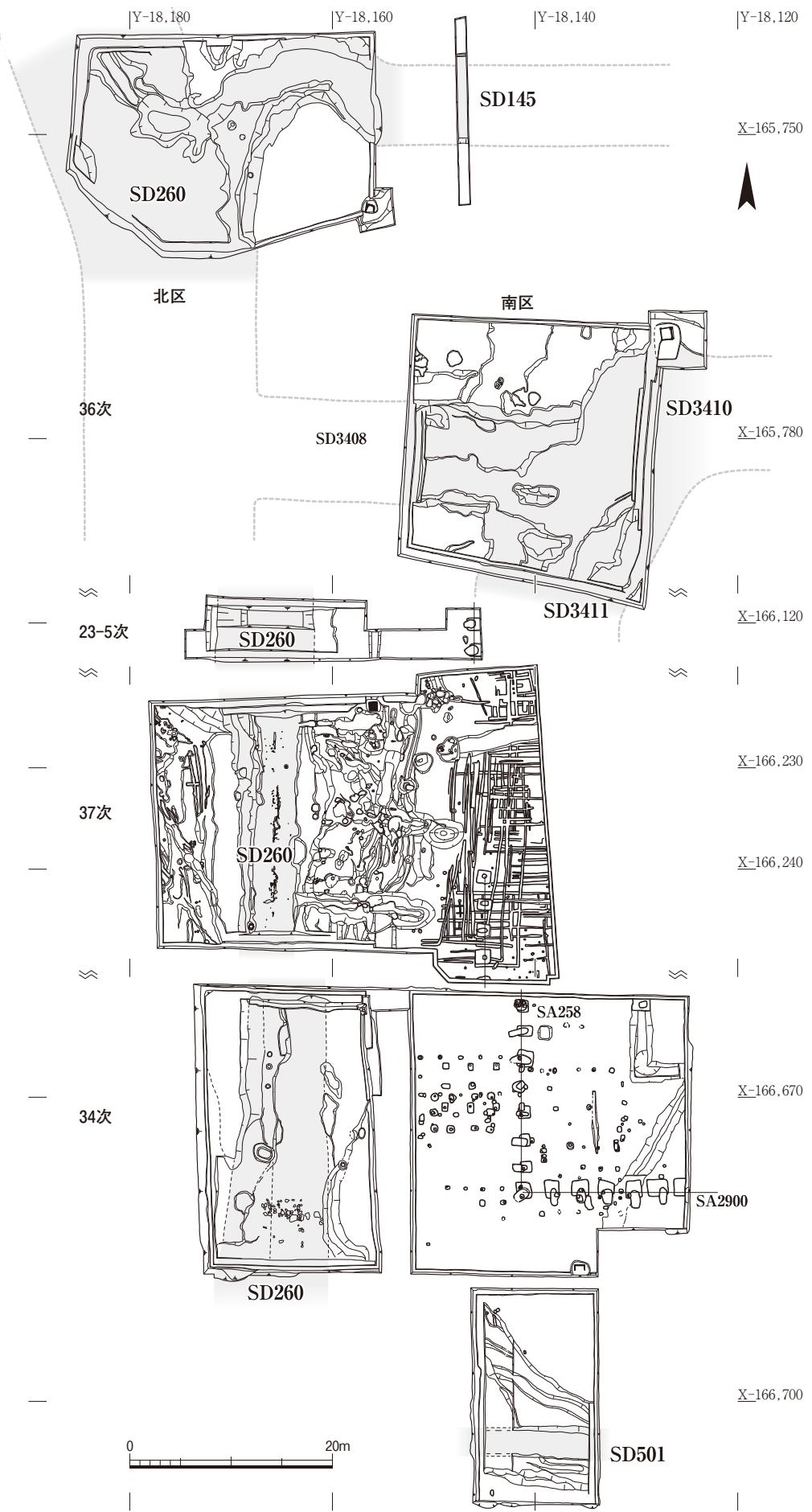


Fig.5 SD145・260・501・3410・3411遺構図 1 : 600

m、深さ0.7mで、埋土は3層に分かれ、下層の灰色砂層から藤原宮期の遺物が出土した。墨書土器は2点出土した。

SD1901A (Fig. 6・7) 藤原宮の中核部、大極殿院南門と大極殿、および北面中門の東端にかかる位置を、朝堂院から北面大垣を抜けてさらに北方へと北流する大規模な南北溝。溝幅は約3~12mで、深さは約2mを測る。先行条坊を壊して掘削しており、藤原宮造営の際の整地土で覆われる。宮造営のための資材を運搬する運河とみられている。大極殿北方の第20次調査で36mにわたり調査し、天武天皇11年（682）~14年（685）に位置付けられる木簡が出土して藤原宮の造営がこの頃には本格化していたことが判明するなど、多くの成果があがった。朝堂院朝庭部での第169次調査区から北面中門の第18次調査区まで、総延長570m以上にわたって確認している。第20次調査区での埋土は4層に分かれ、上部2層は埋立土である。下部2層から、木簡を含む多量の遺物が出土した。

SD1901Aは、藤原宮の造営が進むにつれて順次埋め立てる。大極殿院南門の位置に建物を建設するのに伴い、SD10801Bを掘削して東方に迂回させる。SD10801Bは途中で斜行溝SD11250を掘り、大極殿院南門の北で再びSD1901Aに合流する一方、北方へさらに続き、大極殿の北で東西溝SD11550としてSD1901Aに合流する状況が判明した。SD1901Aは総合的な検討の結果、直線河道の運河としての機能を停止した後、大極殿南方では流水堆積から滞水堆積へ変遷するのに対し、大極殿北方では流水堆積が継続すること、即ち大極殿以南が先行して埋められることが示された。墨書土器は第20次調査で12点、第153次調査で刻書土器が1点出土しており、いずれも直線河道の運河としての時期の所産とみられる。

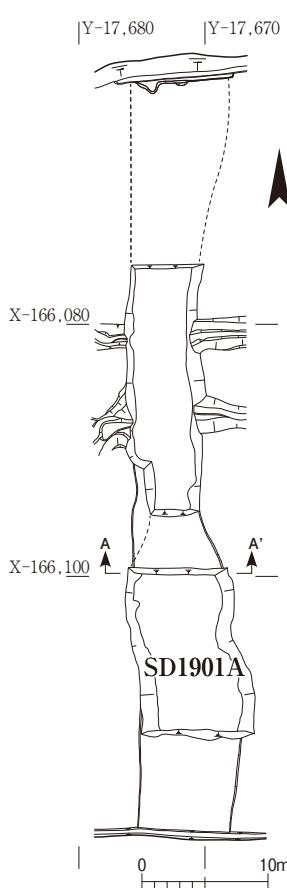
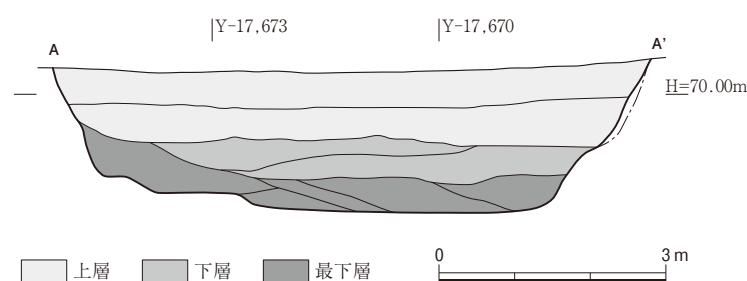


Fig. 6 第20次調査SD1901A
遺構図 1 : 600

SD2300 (Fig. 8・9) 東面大垣SA175の西約12mを北流する南北溝で、宮東面内濠にあたる。第24次調査で長さ約41m、第27次調査で約37m、第29次調査では約36m分を検出した。溝の規模は、幅2.5~3.0m、深さ0.7~0.9m。断面は逆台形状を呈し、埋土は3層に大別される。第1層は廃絶時の埋立土で、それ以下は溝の堆積土である。墨書土器は主に下層から出土した。第24次調査では、土器は溝全体からまんべんなく出土するのではなく数ヶ所に集中する傾向があり、同様の出土状況は木簡でも指摘されている。ただし、墨書土器に限ってみると、そうした傾向は認められない。墨書土器は第24次調査で7点、第27次調査で7点、第29次調査で1点出土した。

SD3410 (Fig. 5) 宮西北隅での第36次調査南区で検出した東西溝。



『木器集成図録—飛鳥・藤原篇1—』(奈文研史料92、2019年)
97頁fig.92掲載図は、座標値に誤りがある。今後は、本図に依られたい。

Fig. 7 第20次調査SD1901A断面図 1 : 100

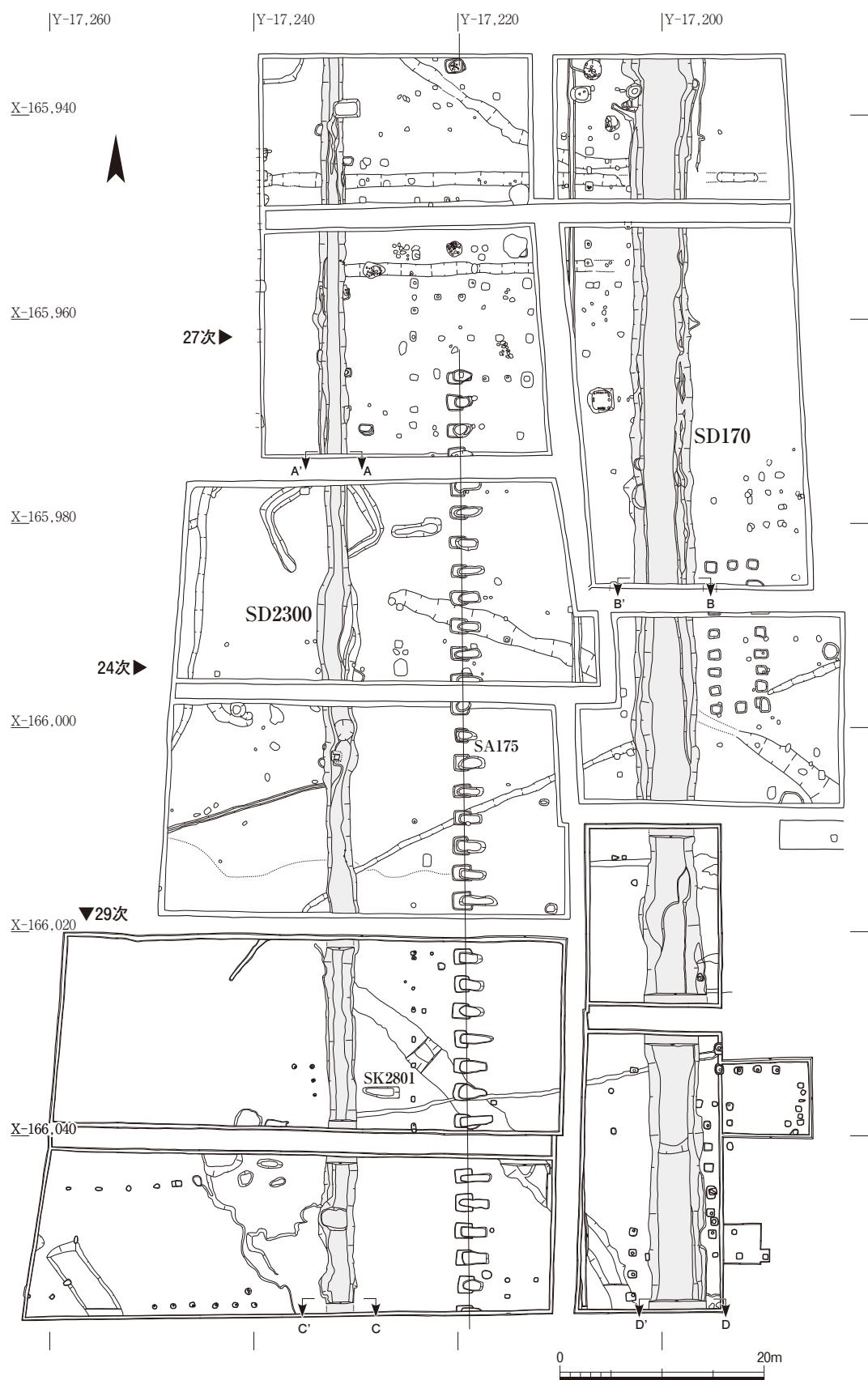


Fig.8 SD170・2300遺構図 1 : 600

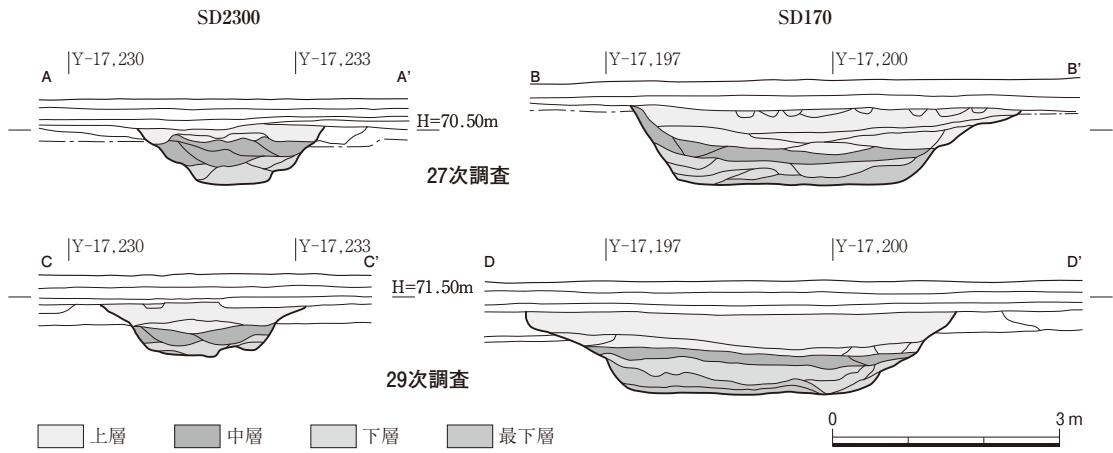


Fig. 9 SD2300・170断面図 1 : 100

宮北面外濠SD145の南約30mを西流し、南北溝SD3411と合流して東西溝SD3408となる。大半が調査区外となるため、幅は不明であるが、深さは1mほどである。埋土は大きく3層に分かれ。墨書土器は、下層から奈良時代前半と平安時代に属するものが1点ずつ出土した。

SD3411 (Fig. 5) 第36次調査南区で検出した南北溝。宮西面外濠SD260の東約35mを北流する。幅15mで、深さは約1.6mである。埋土は大きく3層に分かれ、下層は飛鳥Vから11世紀代、中層は12世紀代、上層は13世紀代に属する遺物を含む。墨書土器は奈良時代中頃のものが1点出土した。

2 藤原京

A 左京六条三坊

藤原宮に東接する一等地にあたる。飛鳥藤原宮跡発掘調査部の新庁舎建設に先立ち、第45・46・47・50・53次調査で計約17,000m²を調査した。検出した遺構は藤原宮期を中心とし、それに続く奈良時代も比較的整然とした遺構が展開する。藤原宮期には四町占地の整然とした配置の官衙がおかれ、それは当初京職、大宝令施行後は左京職と考えられる。東西大溝SD4130と大規模な井戸SE4770から多数の墨書土器が出土し、「香山」と記した土器が注目された。

SD4130 (Fig. 10・11) 新庁舎建設に伴う一連の調査で、第53次調査北区から第45次調査中央区、第47次調査区、第50次調査西区へ西流する大規模な東西溝。合わせて約120m分を確認した。北岸はほぼ直線的だが、南岸は第47次調査区以西で大きく蛇行している。溝幅は西にいくにつれて広くなり、場所によって2.3m～11mと異なる。また、西方およそ20mで実施した第54-1次調査で溝の下流部を検出したが、南岸が推定位置より約10m北へずれており、溝が未調査部分の20m間で曲折するとみられる。

埋土の堆積状況は場所により異なるが、大きく3層に分けられる。出土土器の年代により、下層は飛鳥V、中層は平城宮土器Ⅲを中心とする奈良時代、上層は平安時代以降に該当する。第45・47・50・54-1次調査を合わせて、下層から2点、中層から69点、上層から16点の墨書土器が出土した。「香山」と記したものは、中層に2点、上層に1点ある。

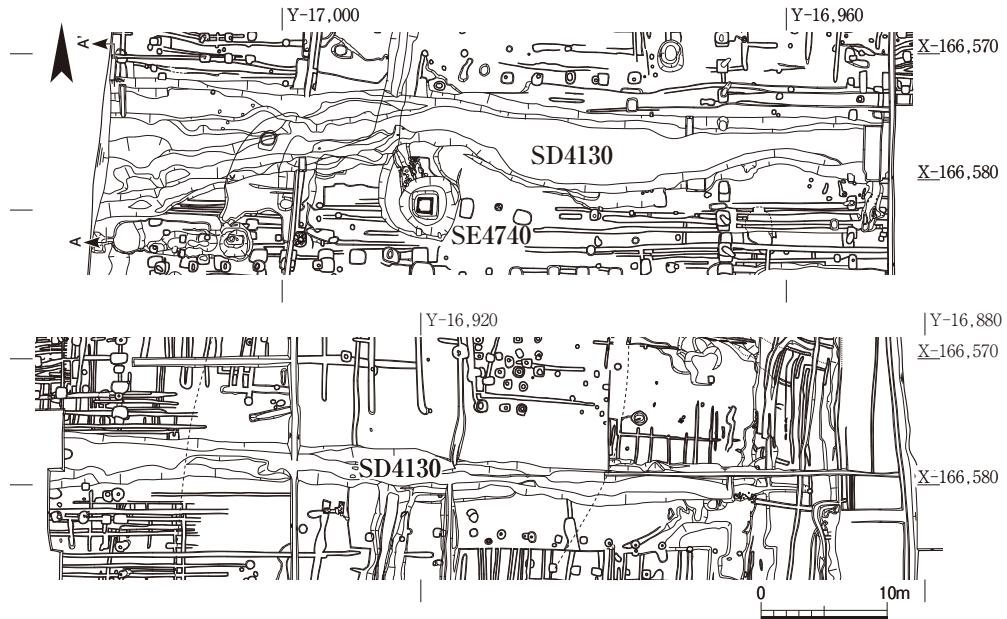


Fig.10 SD4130・SE4740遺構図 1 : 600

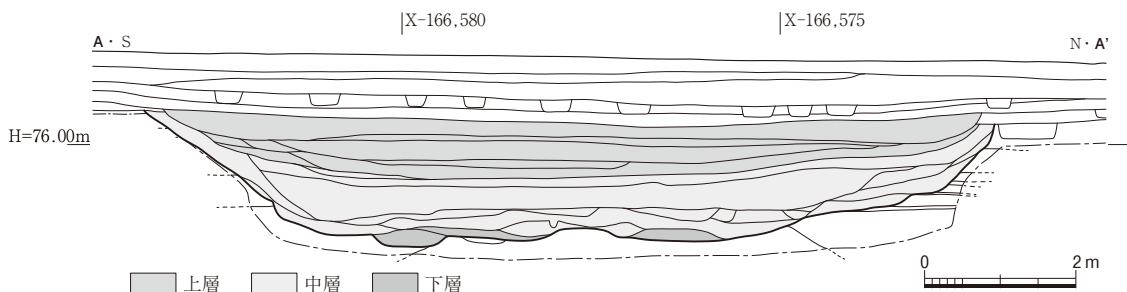


Fig.11 SD4130断面図 1 : 100

SE4740 (Fig10・12) 第47次調査で、SD4130の南岸で検出した方形横板組の井戸。井戸枠は一辺0.9mで、遺構検出面からの深さは3.6mを測る。井戸枠は横板材12段分で、高さ約3mが残存する。掘方は南北4.8m、東西6.2mの不整円形。検出面からの深さ0.3~0.6mのところで径4mの円形に狭まり、底部では一辺1.7mの方形になる。

井戸内の遺物は上層、中層、下層、最下層の4層に分けて取り上げた。最下層は飛鳥Vから奈良時代前半まで、下層は奈良時代中頃の平城宮土器Ⅲから奈良時代後半にかけて、中層はおおむね奈良時代末

の平城宮土器Vから長岡京期、上層は9世紀前半から10世紀前半の年代が与えられる。奈良時代末期にはほぼ埋没し、平安時代中頃に最終的に廃絶したとみられる。

最下層から3点、下層から12点、中層から8点の墨書き土器が出土し、周囲からも3点の墨書き土器の出土がみられる。下層出土の墨書き土器には、「香山」の墨書きがある土師器碗や皿9点を含む。

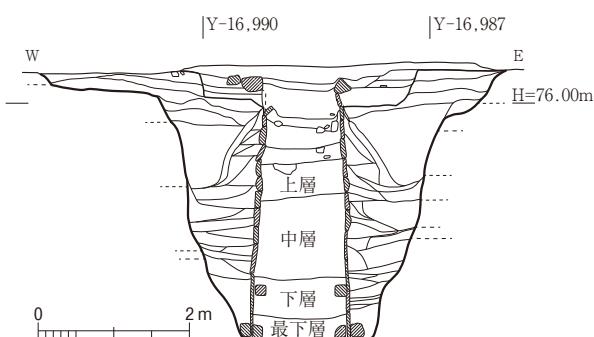


Fig.12 SE4740断面図 1 : 100

B 左京七条一坊

藤原宮に南接する地で、西側には朱雀大路が通る。橿原市市営住宅の建て替え工事に伴って、西南坪のほぼ中央部で、第115次調査として約3,000m²の発掘調査を実施した。検出した遺構は、A期（7世紀中頃～後半）、B期（藤原官期前半）、C期（藤原官期後半）、D期（奈良時代以降）の変遷がたどられる。C期には坪の南北中軸線上に心を合わせた大型の掘立柱東西棟建物SB500が建ち、少なくとも1町占地であったと考えられた。SB500の北西部には池状遺構SX501があり、B期からC期にかけて存続する。SX501から、多量の木簡が出土した。墨書き土器はSX501から3点が出土し、包含層出土のものを合わせると、計9点を数える。この施設は、東接する東南坪出土のものをも合わせた木簡の検討で、四町占地の敷地をもつ衛門府であることが後に明らかとなった。

SX501 (Fig.13・14) 東西約23m、南北10m以上の深い窪地状の遺構。北岸は後世の削平のため失われ、明らかではない。推定される坪の中心近くに南岸をほぼ合わせる。埋土は3層に大別され、上層は埋立土である。中層（暗灰土）、下層（暗灰砂質土）から多くの遺物が出土した。中央部やや南寄りの約6m四方の範囲の暗灰砂質土には大量の木屑を含み、木屑層として取り上げている。木簡の多くは木屑層から出土した。墨書き土器は、3点ともに暗灰砂質土（木屑層）出土である。

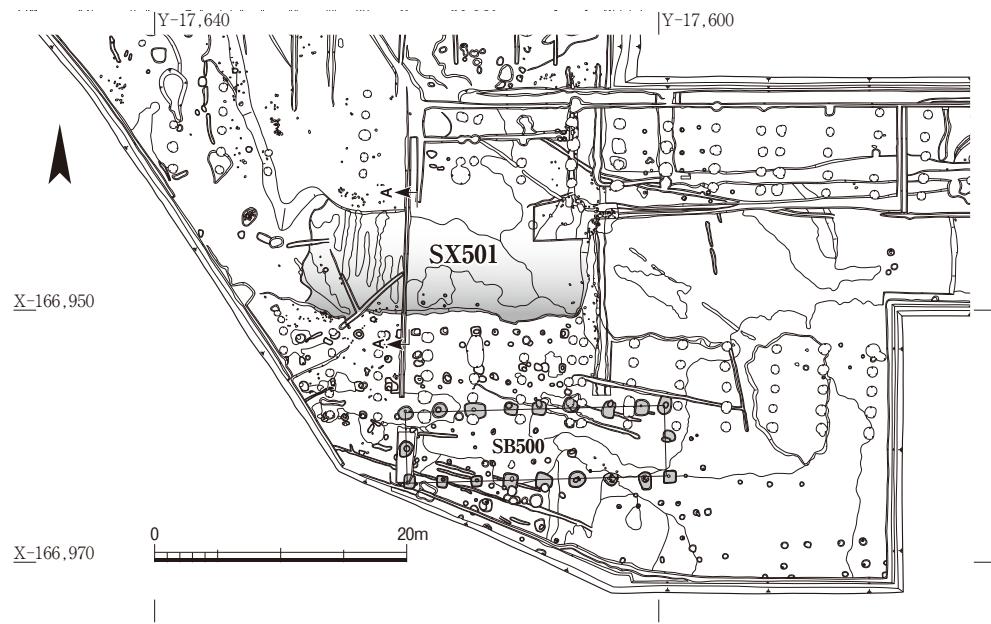


Fig.13 SX501遺構図 1 : 600

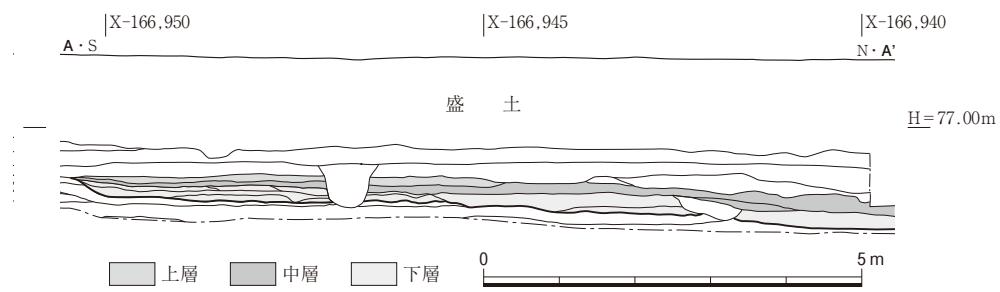
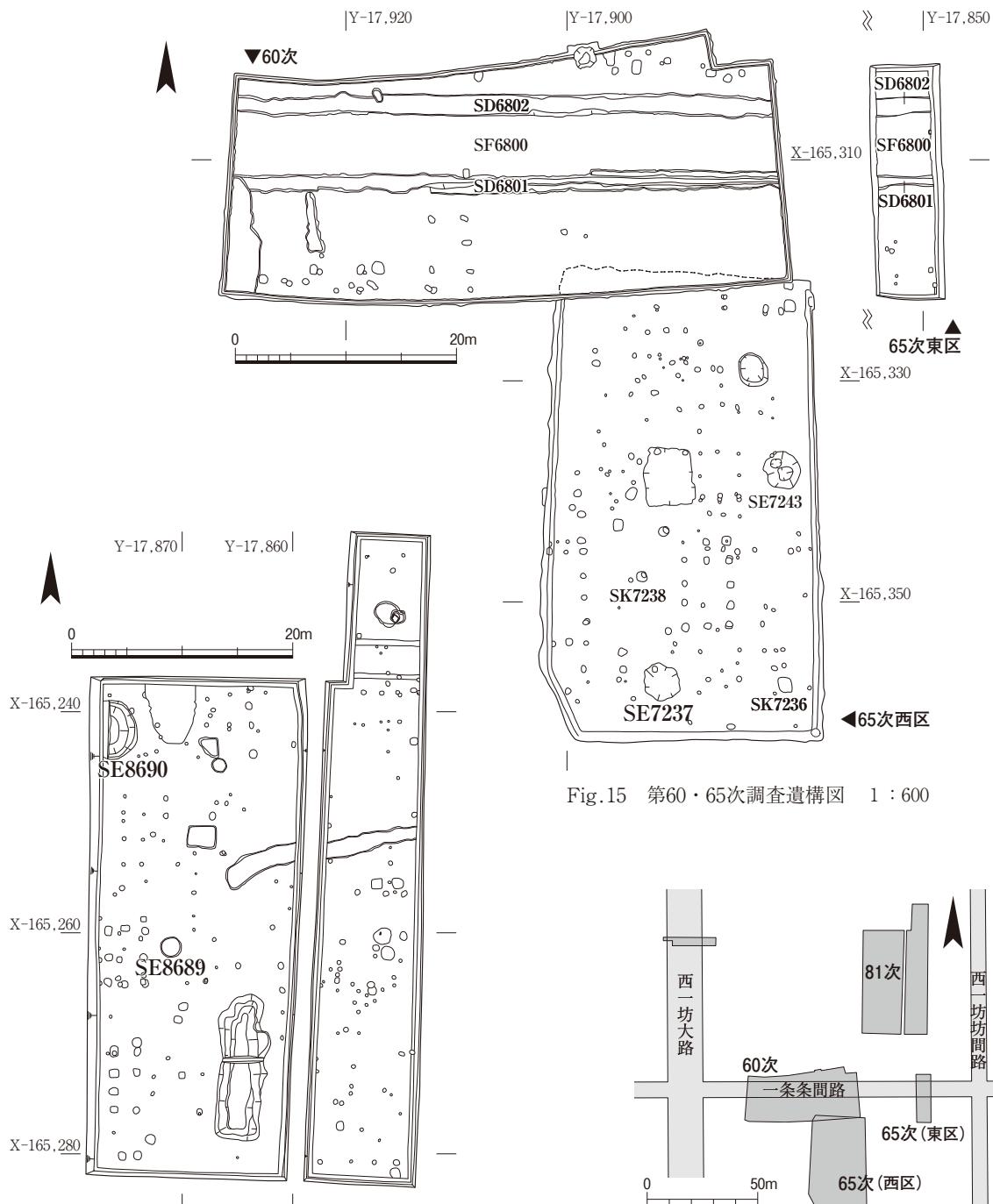


Fig.14 SX501断面図 1 : 100

C 右京一条一坊

藤原宮大極殿から北北西に約100m、耳成山のすぐ南にあたり、東に朱雀大路、北に横大路が通る。右京一条一坊では数次にわたる調査を実施し、西北坪、西南坪、東北坪の様相がある程度明らかになっている。各坪ともに藤原宮期の建物は多くなく、規模も小さい。一方、西北坪で7基、西南坪で3基、東北坪（調査面積約2,000m²）で5基の井戸を検出しており、そのなかには廃絶が奈良時代前半まで下るものがある。西南坪（第65次調査）と西北坪（第81次調査）から墨書き土器が出土した。



第65次調査は、店舗建設に伴い西南坪の中央北部に2,200m²で西調査区、その東北方に126m²で東調査区を設定して実施した。西調査区の北には、第60次調査区が接する。検出した遺構の時期は、7世紀後半から藤原宮期、および奈良時代前半にわたる。井戸は3基検出し、2基(SE7243・7244)に改修の痕跡がみられ、廃絶が奈良時代に下る。もう1基のSE7237も、奈良時代まで存続した可能性が指摘されている。墨書き土器が出土した遺構は、一条条間路南側溝SD6801、SK7236、SE7237、SK7238(飛鳥V～平城II)、SE7243である。

SE7237 (Fig.15) 西南坪中央やや北寄りにある井戸。一条条間路から約50m南に位置する。掘方は円形で、径約3.2m、深さ1.7mを測る。井戸枠は抜き取られており、裏込の礫が一部残る。埋土は大きく3層に分かれ、出土した土器は飛鳥IV～Vが主体だが、一部は奈良時代前半に下る可能性がある。墨書き土器は2点出土した。

第81次調査は、店舗建設に伴い西北坪の中央から南東部よりの1,270m²を調査した。検出した遺構の時期は、藤原宮期から奈良時代前半にわたる。検出した井戸は重複するものを含めて6基で、南方の第60次調査でも坪南端に1基を検出しており、調査面積に比して数が多い。墨書き土器が出土した遺構はSE8689・8690であり、ともに廃絶が奈良時代に下る。

SE8689 (Fig.16) 西北坪中央南寄りにある井戸。円形で、直径1.3m、深さ1.4mを測る。掘方はすり鉢状に掘り下げるが、底付近は周辺の地山が崩れた様子で、断面形はフラスコ状を呈する。井戸枠は抜き取られている。飛鳥Vから奈良時代前半の土器が出土した。墨書き土器は1点ある。

SE8690 (Fig.16) 西北坪中央やや東寄りにある井戸。西半分は調査区外にあるために東半分を掘りあげた。直径5.3m、深さ1.4mを測る。井戸枠は抜き取られている。出土した土器の大半は飛鳥Vに属するが、奈良時代前半の土器も含む。墨書き土器は3点出土した。

D 右京十一・十二条四坊

岸説藤原京の南西隅付近にあたる。病院建設に伴い、980m²を調査した(第54次調査)。調査地は西四坊坊間路のすぐ西で、十一条大路をはさんで西北坪南部と西南坪北部にかかる位置となる。十一条大路をはじめ明確な藤原宮期の遺構は確認できず、奈良時代の溝SD01を検出した。墨書き土器はSD01から6点出土した。

SD01 (Fig.18) 西四坊坊間路のおよそ30m西にある、北流する南北溝。幅は4.4mで、深さは1.3mである。地山の傾斜面に古墳時代の土が堆積し、奈良時代になってその上から溝を掘り込んだものと考えられる。溝の埋土は大きく2層に分けられる。大量の平城宮土器II・IIIの土器に交じって、7世紀後半から飛鳥Vにかけての土器が少く出土した。墨書き土器には、「川桁」「吉□」と記したものがある。

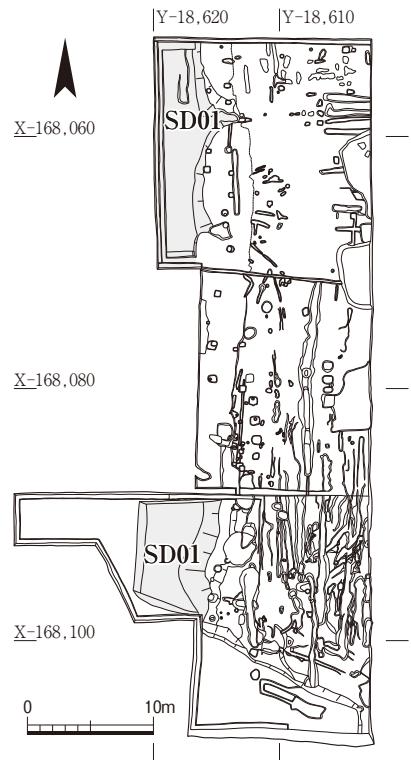


Fig.18 SD01遺構図 1:600